

幼児のロールシャッハ反応 (II)

— 高齢者のロールシャッハ反応との比較検討 —

篠田 (眞砂) 美紀・松島恭子

Rorschach responses of children (II)

— Compare with the old age groups —

MIKI(MANAGO) SHINODA and KYOKO MATUSHIMA

1. はじめに

筆者らは以前、幼児の知覚発達過程について、ロールシャッハ・テストを用いて、各年齢ごとの特徴を報告した(眞砂・松島¹⁾)。この調査では、2歳より刺激の属性をとらえたイメージ喚起が可能であるが、表現は出来ず、また、3歳では微小部分の意味付けにとどまっていた。全体としてまとまりのある反応が可能になるのはほぼ4歳になってからであり、5歳には現実吟味の能力が高まるために反って混乱が生じていた。部分と全体の調整が可能になるのは6歳という結果を得た。さらにこの調査の目的は、人間の精神機能の生涯発達という観点から、人生早期の発達過程と、人生後期の発達過程(以前は衰退過程と呼ばれていたもの)を比較検討するために、特に人生の早期に焦点を絞って検討するものであった。

一方、人生後期の精神機能については、人格特性の側面からこれまで幾つかの報告を行ってきた。従来、人格が崩壊するといわれてきた痴呆性老人にも、周囲の刺激に対する感受性は残されており、人への興味や関心をはじめとする能力はある程度保持されている。しかし、その表現方法に多大な困難があり、外から見れば全く検討はずれの反応に見られる事態が頻発するということが、これらの研究から理解されてきた(眞砂²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾)。

2歳の子どもの場合、インクプロットに対して、その特性をとらえたイメージの喚起が可能であったが、表現の術がなく、説明することができない。痴呆性老人の場合も、この現象によく似たことが生じる。さらに、3歳の子どもの場合、細部への反応が可能であるが、全体を統合することができない。そして、これも痴呆性老人の反応にはよくある事なのである。反応の特徴が類似するからと言って、そのことがそのまま痴呆性老人の子どもがえりを意味するとは考え難いが、生涯発達という大き

な観点から人間を見た時、両者に何等かの類似点と相違点があるのではないかという推測を、これらの研究から得た。

これまでも、幼児のロールシャッハ反応については、欧米や日本の研究家が多く報告をしてきた(Ames, L. B.⁶⁾ Meili-Dworetzk, G.⁷⁾ 小沢⁸⁾ 辻⁹⁾)。また、高齢期のロールシャッハ反応についても同様に数多くの研究がある(Ames, L. B.¹⁰⁾ 下中¹¹⁾ 小野¹²⁾)。幼児期から高齢期を網羅する研究はAmes, L. B.の系列法によるものがあるが¹³⁾、両者を比較検討した研究はなく、意味ある試みではないかと思う。

本研究は、人間の生涯発達の観点からこれまでの研究結果を踏まえ、人生早期と人生後期の知覚発達過程をロールシャッハ・テストをとおして比較検討する試みである。

2. これまでの研究結果の概観

表1と表2は緒家による幼児と高齢者のロールシャッハ反応の結果である。ここに選出した研究家は、日本と欧米諸国において幼児期あるいは高齢期のロールシャッハ研究を集大成したともいえる研究家であり、その研究報告は幼児期および高齢期のロールシャッハ反応の一つの基準値となっているといってよい。従って、ロールシャッハ・テストの結果を比較検討する際に常に付き纏う問題であるスコアリング体系の相違を考慮する必要はあるものの、それぞれの対象の実像にせまる数値として一覧するためにここにあげてみた。日本では小沢も下仲もともに片口法を用いているので、成人の数値も片口のもを挙げている¹⁴⁾。Amesの報告については、文化差や言語の問題を含んでいると思われるが、代表的な研究であるので、その数値を挙げている。また、幼児の年齢が、

表1 幼児と成人のロールシャッハスコア

	A m e s			小 沢			片口
	4才	5才	6才	4才	5才	6才	成人
R	14.7	13.9	15.8	13.8	17.7	21.1	25
R e j							
W%	52	58	51	45.5	34.1	34.6	39.0
D%	38	34	34	49.4	54.8	53.2	50.8
d%							
D d%							8.6
S%							
F%	75	70	60				43.8
F +%	67	78	81				
F・L							
M	0.46	0.56	1.02	0.65	1.17	0.70	3.6
F M	1.22	1.08	1.62	0.80	0.97	1.70	3.4
m	0.18	0.16	0.44	0.15	0.38	0.55	0.7
F C	0.16	0.18	0.40	0.67	0.95	1.57	2.7
C F	0.62	1.18	1.48	0.76	1.35	1.24	1.2
C	0.18	0.24	0.32	0.05	0.07	0.03	0.1
VII~X%							
Σ C	0.97	1.63	2.16	1.17	1.93	2.07	3.5
P							
H%	9	9	11				
A%	56	44	48				
C R							

4歳、5歳、6歳となっているのは、以下のような理由による。3歳児の反応は発達の観点からは興味深いものが多いものの、数量的な集計が非常に難しく、数値の上での検討の意味があまり感じられない。一方、“6歳は多くの子どもにとって一つの転機である”（小沢⁹⁾ p111）と言われるように、この年齢からロールシャッハ反応は大きく変化し、成人のそれに近くなるといわれている。現実吟味の能力もある程度育ち、それまでの幼児型の反応とは異なる様相を帯びてくる。この点については、検査場面で筆者らも強く実感している。これらのことから、今回、発達段階にある幼児の年齢群として、4歳から6歳間の年齢を取り上げた。さらに、高齢期に問題となる状態像として、痴呆状態がある。これは、高齢期に生じる生理的な知能低下とは区別された、器質障害を伴う病的な知能低下であり、高齢期の日常生活に深刻な影響を及ぼすことになる。医学的に痴呆症と診断

された対象群のロールシャッハ反応をまとめた小野の研究による数値と知能検査によって判定された下仲の研究結果をここに挙げる¹⁰⁾（表1 表2）。これらの数値間の検討は厳密な意味においては不可能であるが、次節で自験例による検討のための仮説を得るという目的のために、あえて行った。

1) 反応数

幼児の反応では4歳の13-14から6歳の15-21まで反応数は増加の傾向にある。Klopfers法では成人の反応数は25-40とされているが、片口によると日本の場合はだいたい25前後であるというので、6歳を過ぎる頃には大人に近い生産性となる。下仲による高齢者の報告では20より少ない結果となり、痴呆の場合はさらに少なくなっている。質的なものは別として、生産性という観点から見ると、高齢期の生産性は正常老人でも5-6歳程度とな

表2 高齢者のロールシャッハスコア

	Ames (1973)			下仲 (1977)		小野 (1973)	
	正常	初老	老年	正常	痴呆	* S D	**H. A. S
R	25.9	15.7	13.5	16.3	13.3	11.8	9.7
Rej				0.6	0.9	1.0	2.5
W%	36.1	43.5	46.2	45.7	41.0	40	54
D%	47.2	47.4	44.7	42.0	48.8	49	37
d%				2.7	2.8	6	4
Dd%	15.4	9.2	8.0	6.4	5.9	5	5
S%				6.1	3.2	1	
F%	50.0	63.9	91.5	55.8	73.7	69	54
F+%	93.2	80.7	50.5	73.7	59.8	51	67
F. L							
M	3.3	1.6	0.2	1.7	0.9	1.0	1.3
FM	2.7	2.0	0.3	2.5	1.6	1.3	1.8
m	0.7	0.3	0.0	0.4	0.2	0.2	0.2
FC	0.9	0.3	0.0	0.5	0.4	0.1	0.4
CF	1.3	0.4	0.2	0.8	0.3	0.5	0.1
C	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0		
VII~X%							
ΣC	2.1	0.7	0.2	1.2	0.4		
P	7.1	5.4	2.0	4.7	2.9		
H%	23.7	17.3	4.8	12.2	12.9	20	19
A%	45.6	55.0	39.5	47.0	53.1	59	55
CR	6	5	3	5.6	3.6	2.2	3.8

*老年性痴呆 **脳動脈硬化

り、さらに痴呆の場合は4歳程度と予想される。

2) 反応領域

それぞれの領域でW%とD%の比率にはっきりとした特徴は見られない。Amesの資料では、4歳から6歳までW優位となっているが、小沢の報告ではどの年齢でもむしろD%優位となっている。片口の成人の報告でもD%優位となっている。高齢期の場合、痴呆状態に近づくにつれて、AmesによるとW%優位になり、下仲によるとD%が優位となっている。さらに同じ痴呆状態でも小野によると老年痴呆の場合はD%優位で、脳動脈硬化の場合はW%が優位となる。各研究家の結果によってかなりの相違があり、より詳細な検討が必要と思われる。

3) 反応決定因

F%はAmesの報告に見られるとおり、4歳から6歳にかけて減少し、F+%は増加する。幼児の知覚の発達から考慮しても、他の決定因子が増し、現実吟味能力が高まることは推測できる。F%は成人ではさらに低くなり、高齢期には正常から痴呆状態となるにつれて再び増加してゆく。F%の率を比較すると、Amesの資料によると、高齢期正常群は6歳の率より低い、老年群は4歳の数値よりもかなり高くなる。さらにF+%でも高齢期正常群は幼児群よりはるかに高く、初老群は5-6歳と同程度、さらに老年群は4歳の値よりも低くなっている。下仲の資料によると正常群は5歳程度、小野の資料によると痴呆群はAmesと同様に4歳より低い値となっている。正常群の場合は5-6歳程度かそれ以上の現実吟味力があり、痴呆群の場合、数値的には4歳レベルよりF+%の能力は低くなると予想される。

人間運動反応は4歳では現れず、6歳でようやく1つ生じるといわれている。片口の成人の値では3-4となっているが、高齢期でこの数値を維持しているのはAmesの正常群のみで、下仲の正常群も1.7とかなり低下している。しかし、6歳にあらわれる1つ以上は出現しており、下仲や小野の痴呆群の数値さえも、0.9-1.3を維持している。痴呆群のF+%が4歳の数値より低下したことに比べると、人間運動反応は痴呆でも6歳レベルにとどまることも予想される。しかし、この仮説はAmesの老年群には当てはまらない。

動物運動反応はこれまで人間運動反応よりも早く、4歳で1つのFM反応が与えられているという(小沢)。高齢期では正常群ではぼ2つ、痴呆群ではAmesの老年群が最も低く0.3、後は1.8までの数値となっている。この反応も、数値的には痴呆群であってもほぼ6歳程度の数値にとどまることも予想される。なお、Amesの正常群と片口の成人の値だけが、M優位となっており、幼児と他の高齢者群はFM優位となっている。幼児、高齢者ともにFM優位の共通性をもつ可能性が強いと思われる。

色彩反応は幼児の反応では出現し難いといわれている。幼児が色彩を反応として示すのは、2歳代では少なく、3歳以降に現れてくるといわれている。4-5歳でCF反応が出現し初め、現実吟味能力の高まる6歳頃になって初めてFCが出現する。高齢期もまた色彩反応は出現し難く、Amesの資料ではFCの数値は正常群でさえ1に満たない。下仲の資料では正常群、痴呆群ともに1未満である。さらに、ほとんどの高齢者群のCFの値は、4-5歳で1つ現れるというCFの値よりもまだ低い。またAmesの資料では幼児も高齢者ともにCF優位であるが、日本の資料では小沢の場合、6歳でFC優位となり、成人のFC優位と同型になっている。下仲の正常群と小野のSD群ではCF優位、痴呆群とH.A.S.群でFC優位のままになっている。4-5歳の幼児と高齢者のCF優位傾向に共通性があると位置付けられるかどうかの検討が必要である。

4) 反応内容

幼児の場合、圧倒的に動物が多く、4歳の場合は5割を越える。年齢が高くなるに従って、CRが増加しA%が減少してゆく。一方、高齢期のAmesの老年群の報告でA%がかなり減少しているのは解剖反応が続出したため、反応内容の種類が増したわけではない。下仲の資料では痴呆群のA%が高くなっているが、H%の値はあまり変わらない。小野の値も、H%についてはかなり高くなっている。痴呆状態の場合、A%の値については、4

才程度の値と同じになるが、H%については、かなり高く保持されている可能性がある

3. 自験例による検討

表3は以前著者らが発表した幼児と高齢者のロールシャッハ反応の集計結果である。先の仮説をそれぞれの項目ごとに検証していくことにする。

1) 反応数と拒否

6歳で生産性が大人の生産性に近くなるとすると、高齢正常群の数値は、それよりやや低く、5歳レベルと考えられる。痴呆状態の場合は4歳あるいはその年齢以下の生産性と考えざるを得ない。さらに拒否は6歳よりも正常群がかなり少なく、痴呆群が6歳の数値に近かった。生産能力という点では6歳児が最も高いが、場面への適応についてはやはり高齢期の正常群が最も良く、痴呆群でも6歳程度の適応意欲を有していると考えられる。

2) 反応領域

諸家の数値からは特徴が見出だせなかったが、この資料の4歳と5歳ではW%が優位となり、6歳でD%が優位となっている。一方高齢期はW%が優位であり、全体志向は、4-5歳と同じである。質的にかなり違いのあることは容易に想像できるが、4-5歳児と高齢者に全体志向性という共通点が見出だされる。また、幼児、高齢者ともにW%やD%よりもむしろその他の項目の動きが認められている。5歳児では細部への拘りが増すため、d%とS%は高くなっているが、これと同じような傾向が正常群の高齢者ではS%に認められ、痴呆群ではd%、S%ともに認められている。痴呆群ではDd%の値が極端に高く、4歳の値よりもかなり高い。WとDの割合よりも、間隙や異常部分への拘り方が5歳レベルと正常高齢者では似ており、さらに痴呆群では微小部分と異常部分への拘りが4歳レベルに近くなると考えられる。幼児期の反応では5歳児になると、吟味力が増すため、逆に反応に混乱がみられるようになるが、同じような傾向が高齢期の生理的な老化過程に生じるようである。また、4歳児の微小部分への拘りなどは痴呆群に見られ、4-5歳児に生じる知覚過程の変化が高齢期の正常-痴呆化過程で逆行という形で現れるのではないかと推測される。

3) 反応決定因

F%は4-5歳児でかなり高く、6歳児で急に低下する。高齢者の場合、F%は高くなると言われるが、それは成人と比較検討した場合であって、痴呆群でも6歳の

表3 幼児と高齢者のロールシャッハスコア

	眞砂 (1991)			眞砂 (1988)	
	4才	5才	6才	正常	痴呆
R	11.9	16.2	21.3	16.3	12.6
R e j	3.2	2.5	1.8	0.8	1.7
W%	49.1	42.2	42.0	53.6	52.9
D%	34.7	40.6	52.0	41.0	35.3
d%	6.4	8.6	0.0	0.8	5.5
D d%	7.0	6.0	3.6	5.0	9.1
S%	0.7	3.8	1.4	4.1	5.3
F%	86.4	80.8	69.6	52.4	65.9
F +%	66.0	76.3	65.1	80.9	62.5
F・L	0.8	0.7	0.8	1.0	0.6
M	0.3	0.5	1.3	1.6	1.4
FM	0.6	1.0	1.3	3.0	1.5
m	0.1	0.83	1.8	0.9	0.4
FC	0.2	1.0	0.5	0.8	0.2
CF	0.9	0.5	1.8	1.3	0.7
C	0	0	0	0.2	0.03
VIII~X%	27.7	28.8	30.7		
ΣC	0.9	0.8	1.5	1.9	0.9
P	2.4	2.8	4.8	4.7	3.0
H%	4.8	15.4	10.5	12.7	20.5
A%	58.2	70.7	55.7	57.1	52.9
CR	3.8	3.8	6.8	4.8	3.8

値よりも低くなっている。このことから高齢者はたとえ痴呆群であってもF反応以外の決定因が多く含まれていると考えられ、感受性と表現という点では、6歳以下の幼児よりもバラエティに富んでいると考えられる。ところが、F+を見ると、高齢期正常群は幼児よりかなり高い数値を維持し、現実吟味能力の高さを物語っている一方、痴呆群は4歳児よりも値が低い。先にあげた6歳レベル以上の感受性と表現の多様性を持ちながら、4歳レベルより低い現実吟味能力しかない。このアンバランスが日常生活の困難さという問題に繋がっているとも考えられる。F・Lはこれらのことを裏付けているかのように、正常高齢者が最も高く、幼児、痴呆群と続いている。Amesらの資料に比べて、幼児の反応の単調さ、痴呆群を含んだ高齢者全般の反応の多様さ、正常高齢者の現実吟味能力の高さと、痴呆群のアンバランスさが強調された結果となった。

人間運動反応は仮説に述べたとおり、6歳で1つの反応が現れている。痴呆群でも1.4という値となり、この調査結果でもほぼ6歳レベルの能力が保持されていると考えられた。正常高齢者の値が他の4群に比べて最も高いが、痴呆群とはあまり変わらず、両者ともに6歳レベル以上にあると考えられた。

動物運動反応は4歳ではなく5歳になって1つの反応が現れている。動物運動反応と人間運動反応の割合は、この調査においては6歳で同等となるが、幼児・高齢者共に、FM優位である。さらにここでも高齢期の2群の数値は6歳レベル以上にある。よって、運動反応全体では、高齢者は6歳レベル以上の能力にあると考えられる。

色彩反応は小沢の資料で6歳にFC優位となっていたが、この調査においては5歳に同様の傾向がみられた。しかし、FC優位はこの年齢だけであり、他の群はCF優位である。情緒刺激への反応性を示すΣCは6歳児よ

りも高齢期正常群が最も高い。しかし、痴呆の場合は4-5歳と同レベルの反応性となっているうえに、数値が1よりも少ない。情緒的な刺激に対してなんらかの情緒を含んだ反応を表現することは痴呆性老人にとってかなり難しいようである。FC反応やCF反応からも4歳程度の表現あるいはそれより低い年齢の表現方法にならざるを得ないと思われる。

4) 反応内容

幼児の平凡反応は4歳から6歳にかけて増加し、常識的なものの見方が確実に獲得されていく。一方で正常高齢者では、ほぼ6歳と同じぐらいの平凡反応が現れている。痴呆群の場合は、5歳の値を少し越える程度であった。常識的なものの見方としては、高齢期に痴呆状態となっても5歳レベルは可能であると思われる。H%とA%については、この資料の場合、5歳にH%とA%が突如と高くなるが、6歳ではH%もA%も低下している。CRの増加が著しく、他のContentの増加が、H%とA%の低下に繋がったようである。一方、高齢者では痴呆群のA%が低く、H%が正常群よりも高い。CRは6歳が最も多く、高齢正常群の反応の内容は6歳児より狭くなっている。高齢痴呆群は4-5歳と同じである。4歳ではあまり現れなかった人間の反応は5歳になって急増するが、6歳になると内容の幅が広がり、率としては低下する。高齢期では逆に内容の幅が狭くなる一方、人間の反応が保持されるので、H%が高くなると思われる。4歳程度になると予想された痴呆群のA%は、H%が高くなったためか、6歳児よりも低い値となっている。反応の内容の割合については、幼児と高齢者ではやや異なる結果となった。

<まとめ>

幼児の反応を、大人に近いとされる6歳の反応とより未分化な4歳の反応、その移行期にある5歳の反応という大まかなとらえ方をした上で、高齢者の反応とどのような関係にあるかを数量的に検討してみた。状況反応性という点では、6歳児が最も高く、高齢期正常群は5歳児に相当した。高齢期痴呆群の反応性は最も低く、4歳児以下であった。一方、状況を避けようとする拒否は、高齢者群が2群ともに幼児群より少なく、6歳児よりも状況への対応が可能である。反応領域では高齢期正常群と5歳児に共通する特徴が現れ、また、痴呆群はより未分化な4歳児に近い特徴が見られていた。反応決定因は幼児と高齢者で特徴が異なり、比較して一概に述べることは難しい。刺激状況への感受性と表現力（情緒表現と

いう点では異なる）は、高齢者は6歳児より能力が高い。運動反応に示される能力も6歳児より高く現れている。ここで正常高齢者の場合は、現実吟味能力も6歳以上に保たれているので、問題はないが、痴呆群の場合は現実吟味能力が4歳に満たないレベルまで下がっているのか、かなり問題となって現れることが容易に推察できる。また幼児も高齢者も情緒刺激に対する反応は少ない。痴呆群と4歳の幼児は情緒への対応が苦手、なかなかコントロールしたり表現したりできないが、正常高齢者の群は他に比べてコントロールと表現がまだしも可能である。平凡反応は正常高齢者が6歳とほぼ同レベルである。痴呆群の場合はやや少なくなり、5歳とほぼ同じになる。反応内容の幅は正常高齢者であっても6歳児より狭くなっている。痴呆群になると、4-5歳とほぼ同程度となる。高齢期に、興味や関心事の範囲が狭くなる傾向はここに現れていると言ってよい。しかし、人間についての関心は高齢者に高く現れており、特に痴呆群にこの傾向が著しいといえる。

4. 結論と考察

ここでは先のロールシャッハ反応の比較検討結果をもとにして、幼児と高齢者の知覚発達過程について考察する。ロールシャッハ・テストの結果を数量比較することは、単に数値の比較だけではなく、その数値の意味する知覚形式を理解し吟味する必要がある。もちろんここで扱った数値は、すべて平均値なので、本来個人のパーソナリティを分析するための解釈が、いわば、数値で造り上げられた平均的な人間像の特徴を比較するという性質のものである。

幼児の反応は4歳から6歳の時期に大きく変化する。非常に未文化的な反応から、分化され統合された反応へと変容して行く。一方、高齢者の反応はこれまでの研究結果では、成人に比べて貧困な反応形式へと変化するといわれてきた。この貧困という発想を、生涯発達という観点からとらえ直そうとしたのが今回の研究の意図である。

先の検討の結果では、高齢者の反応と幼児の反応を比較した場合、数値的に幼児の反応と同じレベルに到達する項目もあるが、逆に、幼児レベルには逆行しない部分も残されていると判断され、高齢期の知覚が幼児期の未分化なそれとはやはり異なると結論づけられる。

まず、幼児の反応が全体的な纏まりを持って、4歳から6歳へと発達してゆく一方、高齢者の反応は、部分的に高齢化の特徴を帯びていると考えられ、この部分的な高齢化の特徴が、時として幼児のレベルにまで相当してくるのではないであろうか。

例えば、決定因子の項では、高齢者群が2群ともに幼児群よりももの見方が多様であることが明らかになっているが(F%の低さ)、反応数や反応内容からは、正常群でさえ、状況に対する反応性は6歳児よりも少なく、興味や関心の幅も狭くなっていることが分かる。先にも述べたように、幼児では、4歳でFC反応や、M反応の現れることは極めて少なく、F優位の反応である。6歳にかけて少しずつ、これらの反応が出現してくるのであるが、高齢者では、痴呆性老人でさえ、少ないながらも色彩反応や運動反応は現れており、そのために、幼児ほどのF優位にはなっていない。簡単にいえば、形態反応は物事を客観的に見る知覚形式を、運動反応は主観的に見る知覚形式を、色彩反応は外界から刺激され易い知覚形式を現していると考えられている。高齢者の場合は、これらの知覚形式が、複雑に作用した知覚形式を有しており、さらに常識的な判断力も加わるためか、状況からの拒否は少ない。逆に幼児の場合は、単純な客観的知覚に止まり、常識的判断力もまだ発達上にあるため、場面の拒否が多くなっている。しかし、その興味の多さと、状況への反応の多さは、正常な老化を示す高齢者でさえも、6歳児にはかなわない。

ところが、痴呆性老人の場合は、一方で、上記のような特徴を示しながらも、知覚過程の特徴としては4歳児の未分化な反応と極めて近い状態にあった。特に、形態吟味の機能が低下しており、先の解釈でいえば、現実を正しく在りのままに認識する能力が決定的に低くなっている。ここで4歳児の知覚形式と異なるのは、何度も述べるが、子供の単純な客観的認知に伴う認知のずれではなく、多様な物の見方が可能であるうえで、さらに認知のずれが生じるという点である。自分なりの主観的なもの見方や、人に関する興味や関心を有したうえで、とらえる現実が、実際に生じている事態と異なるという悲しい現象の頻発することが予想される。

最後に、反応領域については、5歳児に生じる変化が、高齢期でも生じていた。筆者のデータではW優位の5歳児から6歳児になるとD優位となっており、5歳での混乱はこの変化の過程で生じる混乱とも受け止められる。とすれば、成人の反応から高齢期に至るもっと早い段階で、W%とD%の値に何かの変化がある可能性もあり得る。5歳児に生じる原因が、現実吟味力の上昇とするならば、高齢期に生じる原因が認知機能の弱体化による全体統合力の低下と仮定することもできるのではないか。また、痴呆性老人のDd%の多さなどは、4歳児の反応形式とよく似ており、幼児期の現実吟味力と全体統合力の増加は、高齢期における老化過程で、逆行として現れ

るとも考えられる。しかし、今回の資料からではそこまで結論づけることはできない。

5. 問題点と今後の課題

以上、非常に粗削りな方法で幼児と高齢者のロールシャッハ反応を概観してきた。この方法論は、1930年代に盛んに行われた知能の横断的研究と通じるところがある。かつて18歳を頂上として、知能の低下が始まるというMiles夫妻による研究報告があった。現在では古典的研究とも呼ばれており、過去の研究報告となっている。高齢者の知能は60歳まで発達し続け、その後緩やかに低下するという報告が、現在の高齢者の知能に関する報告である¹⁰⁾。

今回、4歳児から6歳児の反応と、高齢者の反応を比較検討したが、特に痴呆状態の高齢者と、4歳児の反応の類似性が高かった。だからといって、痴呆状態にある高齢者が4歳のレベルまで逆戻りするということを意味はしない。幼児よりも高く維持されている機能もあり、部分的にみれば似通っていても、全体としては異なった在り方を示すと考えられる。今回の検討はその在り方の差異を解明する第1歩に過ぎない。

今回の検討には、成人の自験データがなく、人間の長い成長の過程で、早期と後期の比較という、前後比較に終わってしまっている。先行研究においては、成人と高齢者のプロトコルが比較され尽くした感があるが、近年の研究では成人の研究は逆に乏しく、新たな成人像を明らかにする作業も必要になっている。

量的にはサンプル数の少なさが問題であり、一方では質的な検討が欠かせない。個別の事例研究も行い、数量的な側面と質的な側面の両方からアプローチしてゆきたいと思っている。

文 献

- 1) 眞砂美紀・松島恭子：幼児のロールシャッハ反応。大阪市立大学生生活科学部紀要、第39巻、P243-253、1991。
- 2) 眞砂美紀：ロールシャッハ・テストから見た痴呆老人の人格特性。心理臨床学研究、VOL.6 No.1、P4-15、1988。
- 3) 眞砂美紀・氏原寛：痴呆性老人のロールシャッハ解釈。大阪市立大学生生活科学部紀要、第36巻、P243-253、1988。

- 4) 眞砂美紀・氏原寛：痴呆性老人のロールシャッハ反応—人間反応の検討—。大阪市立大学生生活科学部紀要。第37巻。P169-176。1989。
- 5) 眞砂美紀：痴呆性老人のロールシャッハ反応—痴呆の進行に伴う反応の変化について—。大阪市立大学生生活科学部児童・家族相談所紀要。第8号。P21-32。1991。
- 6) Ames.L.B.:Child Rorschach responses.Poul B Hoeber. 1952.
- 7) Meili-Dworetzki,G.:The Development of Perception in the Rorschach.Developments in the Rorschach Technique.Vol. II. P104-176. World Book. 1956.
- 8) 小沢牧子：子どものロールシャッハ反応。日本文化科学社。1970。
- 9) 辻 悟他：児童の反応。『心理診断法双書 ロールシャッハ・テスト1』P272-348。中山書店。1955。
- 10) Ames.L.B.:Rorschach Responses in Old Age. New York.A Hoeber Harper Book. 1954.
- 11) 下仲順子・中里克治：老人のロールシャッハ反応における加齢と痴呆要因の研究。ロールシャッハ研究XXXIII。金子書房。1991。
- 12) 小野和雄：ロールシャッハ・テストよりみた痴呆の研究。ロールシャッハ研究XIV。P83-102。1972。
- 13) Ames.L.B.:Changes in Rorschach Response Throughout The Human Life Span. Genetic Psychology Monographs.74. 89-125. 1966.
- 14) 片口安史：新・心理診断法。金子書房。1987。
- 15) 下仲順子：ロールシャッハ・テストよりみた老人の人格機能。社会老年学。N07。東京大学出版会。1977。
- 16) 長嶋紀一他：老人心理学。介護福祉士選書7。健帛社。1990。P46-64。

Summary

In this paper, the Rorschach responses of children compare with those of the old age people. At first, some records of Rorschach researchers who once examined children and old age groups are compared with each other. We obtained some hypotheses through this process. And then, on the basis of these hypotheses, we examined our own data. The records of children and normal old age group, old age demented group are compared.

As the result, the percept of the old age people is different from that of the child. Some items are same level with child score in quantity, the others don't turn back.

Two old age groups are superior to 6 years old in terms of some scores. Low F% shows diversity of reaction which include movement response and color response. High F% of child group shows simplicity. On the otherside, the 6 years old group is superior to normal old age group in terms of reaction in quantity and content range. Old age people have more complicated perception and common sense than child, so they reject few scene. The child have only simple perception of objectivity, and little common sense, so they reject many scenes. But the 6 years old child is more interested in the scene and give more reaction than normal old age people.

The scores of old age demented people are similar to that of 4 years old child. Particularly low form level shows low reality test function.

Lastly the same change happens at 5 years old child and old age people in terms of the reaction area. This may be turning back to child perception of old age people, but we don't have any conclusion in this paper.